

# Development and evaluation of the Sedentary Behavior and Light-Intensity Physical Activity Questionnaire

田中, るみ

<https://hdl.handle.net/2324/4474993>

---

出版情報 : Kyushu University, 2020, 博士 (看護学), 課程博士  
バージョン :  
権利関係 :

氏名	田中 るみ			
論文名	Development and evaluation of the Sedentary Behavior and Light-Intensity Physical Activity Questionnaire (座位行動・低強度身体活動質問紙の開発と評価)			
論文調査委員	主査	九州大学	教授	鳩野 洋子
	副査	九州大学	教授	後藤 健一
	副査	九州大学	教授	橋口 暢子

## 論文審査の結果の要旨

低強度身体活動は、生活習慣病予防や心理社会的な効果などがあることにより注目されているが、中高年の身体活動が不活発な人の低強度身体活動状況について質問紙によって把握することが可能な質問紙は開発されていない。本研究の目的は、低強度身体活動質問紙(Sedentary Behavior and Light-Intensity Physical Activity;SLPAQ)を開発し、信頼性・妥当性を検討することである。

SLPAQの質問項目は、文献レビューと11名の身体活動が不活発なものに対するインタビューを通じて特定された。これらの項目原案は、31名の下肢人工関節置換術後患者と専門家パネルにより内容妥当性の評価が行われ、17項目に整理された。この項目について、下肢人工関節置換術後患者138名に質問紙調査への2度の回答と、基準関連妥当性の調査のための加速度計の装着を依頼し、最終的に112名からの有効回答を得た。

項目分析により床項目がみられた7項目を削除し、質問紙は6つの座位行動、4つの低強度身体活動からなるSLPAQ-10に改訂された。SLPAQ-10の再テスト信頼性は、高い相関件数を示した。また、加速度計とSLPAQ-10による活動量は低～中程度の相関係数が見られた。Bland-Altman分析においては、若干の比例誤差は見られるものの許容範囲であった。

過去の尺度と比較し、SLPAQ-10は回答が簡便で、かつ低強度身体活動の測定において妥当性を有することが明らかとなった。また比例誤差に関しては先行研究でも問題とされている、加速度計が静止時間を座位行動として過剰に測定すること等が要因と考えられた。本研究対象者は中高年の下肢人工関節置換術後患者のみを対象としているため、不活発な中高年者に対する一般化には限界を有するものの、中高年の低身体活動量を測定する上で、はじめての妥当性を有した尺度であり、今後の高齢化の進展の状況などを踏まえると、中高年の健康増進活動への幅広い活用が期待できる。

予備調査において、各調査委員より専門的な観点から論文内容及びこれに関連した事項について種々質問を行ったが、いずれについても概ね適切な回答を得た。よって本論文は予備調査委員合議の上、博士(看護学)の学位に値する論文として価値あるものと認める。

主査 鳩野 洋子  
副査 後藤 健一  
副査 橋口 暢子